

【基調講演①】

“尾駁の駒”を歌語にまで高めた王朝歌人の東北心象風景

富山大学・聖徳大学名誉教授 山口 博

【前回の要旨】

ユーラシア大陸を西から東へ駆けて来た斑の動物は、斑という並ではない状態であるゆえに、神聖視された。斑模様の馬も神や英雄の乗り物であった。尾駁の駒も例外ではない。後撰集の歌の「尾駁の駒は野飼ふには」ではなく「尾駁の駒も野飼ふには」である。神聖な尾駁の駒も野飼いなどすると、あばれ馬になると歌ったのである。

【今回の要旨】

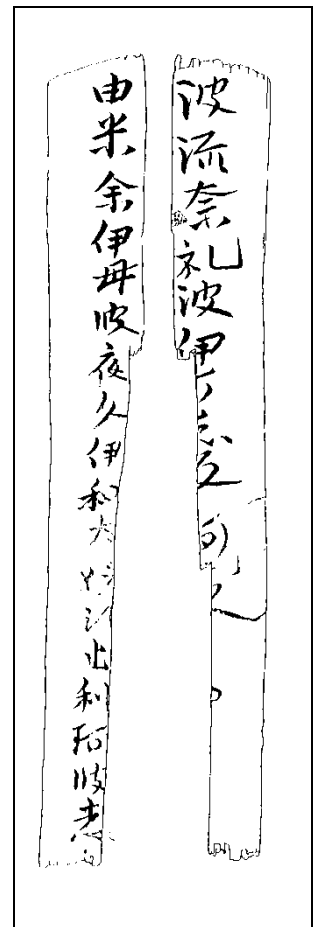
陸奥への関心から尾駁の駒も歌語として広まった。それ故に、尾駁が斑模様なのやら地名なのやらも分からなくなり、陸奥の馬は荒々しい馬という概念の中に埋没、神聖さは失われた。

I 出羽国出羽柵（秋田城）出土歌木簡

波流奈礼波伊万志 [] (表) 由米余伊
 母波夜久伊和太□□止利珂波志 [] (裏)
 春なれば今し
 夢よ妹はやくい渡□□取り交はし

万葉集にはない歌

- 1 出羽国出羽柵（城） 築造は文武天皇の大宝元年（701）頃
秋田市寺内高清水公園内の秋田城跡
- 2 歌木簡出土穴から、300点の木簡出土 「延暦十年（791）」 「延暦十三年（794）」 「延暦十四年（795）」 記載の木簡あり。歌木簡もこの頃書かれ捨てられたか。
延暦十三年（794） 大伴弟麻呂・坂上田村麻呂、蝦夷を征す。
- 3 出羽柵への古代アクセス
 - i 海路 齐明天皇4～6年（658～660） 阿倍比羅夫 蝦夷征伐で齧田浦^{あぎた}に到着。
 - ii 陸奥多賀柵→出羽柵 天平宝字3年（759） 開通



II 陸奥・出羽と関係ある歌人・文人（*は陸奥を詠んだ歌人）

1 陸奥在住の万葉歌人

陸奥前采女 ^{みやび}風流びたる乙女^{あさか}安積山影さへ見ゆる山の井の 浅き心をわが思はなくに（万葉集3807）

【古今集序「この歌は、歌の父母で、手習いする人が最初に習うもの」】

香取女を愛した男

筑紫なる匂ふ見ゆゑに陸奥の 香取乙女の結ひし紐解く (万葉集東歌 3427)

2 都から陸奥・出羽に足を運んだ歌人たち

陸奥国 守：万葉歌人 石川年足 (1 首) 大伴駿河麻呂 (11 首) *大伴家持 (479 首)

平安歌人 小野岑守 (勅撰漢詩集編者) 阿倍清行 小野春風 小野篁 (岑守同伴)

藤原真興 (陸奥で没) *藤原実方 (陸奥で没) *橘為仲 (和歌六人党) 平兼盛 *
源重之 (陸奥で没) *源信明 橘則光 *某 (主殿集の男) *さねちか (重之集
180) 源頼清 (相模、歌を贈る)

将軍 某 (能宣集)

出羽国 守：出羽守小野良真娘 (小野小町) *行房 (姓不明 為仲集)

介：藤原敏行

視察：葛城王 (橘諸兄 万葉歌人 8 首)

下向 源重之の子*宗親 *能因

3 自身は陸奥へ足を運ばないが、家族が陸奥に下った人たち

蜻蛉日記作者 父は陸奥守藤原倫寧^{ともやす} 大中臣能宣 愛人下向 (能宣集)

4 足を運ばないが、陸奥の歌を詠んだ人たち

笠^{かさ}女郎^{のいらつめ} 源融^{とおる} (河原左大臣) 紀貫之^{おののり} 壬生忠岑^{おののぶ} 大中臣能宣 (屏風歌・餞歌他) 和泉式部 相
模^{なかつかさ} 中務^{なかつかさ} 清原元輔 (清少納言の父) 清少納言 (夫は陸奥守橘則光) 紀伊入道素意 (為仲集)
左衛門権佐行家 (為仲集) 散位実清 (為仲集) 伊勢守広経 (為仲集) 藤原通雅 (和歌六人党の社交場)
小大君 尾張 (太皇太后宮寛子女房) 甲斐 (太皇太后宮寛子女房) 主殿 中納言定頼 源頼政
藤原俊成 藤原清輔 藤原家隆 西行 道因 藤原定家

III 「尾駁の駒」歌人相関図

1 後撰集時代 梨壺五人 (源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城) の時代

天曆5年 (951)、梨壺に和歌所を置き、『後撰集』撰集

「源順と云ふ人、後撰の撰者として梨壺五人の随一たり」(北畠親房卿古今集序注)

「源順はもの知りにて、梨壺五人が中にもすぐれたる才人」(歴代和歌勅撰考)

源順「馬毛歌合」 斑馬

底ひなき淵

柁^{たくなわ}繩の絶えても止みね底ひなき 淵^{かづ}には潜く海人もあらじを

【淵一斑】

後撰集某歌人

男の、初め如何^{いか}に思へる様にかありけむ、女の気色も心解^{けしき}けぬを見て、「怪しく思はぬ様なること」と言ひ侍りければ、(女)

陸奥の尾駁の駒も野飼ふには 荒れこそ増され懐くものかは (巻18 雑4 1253)

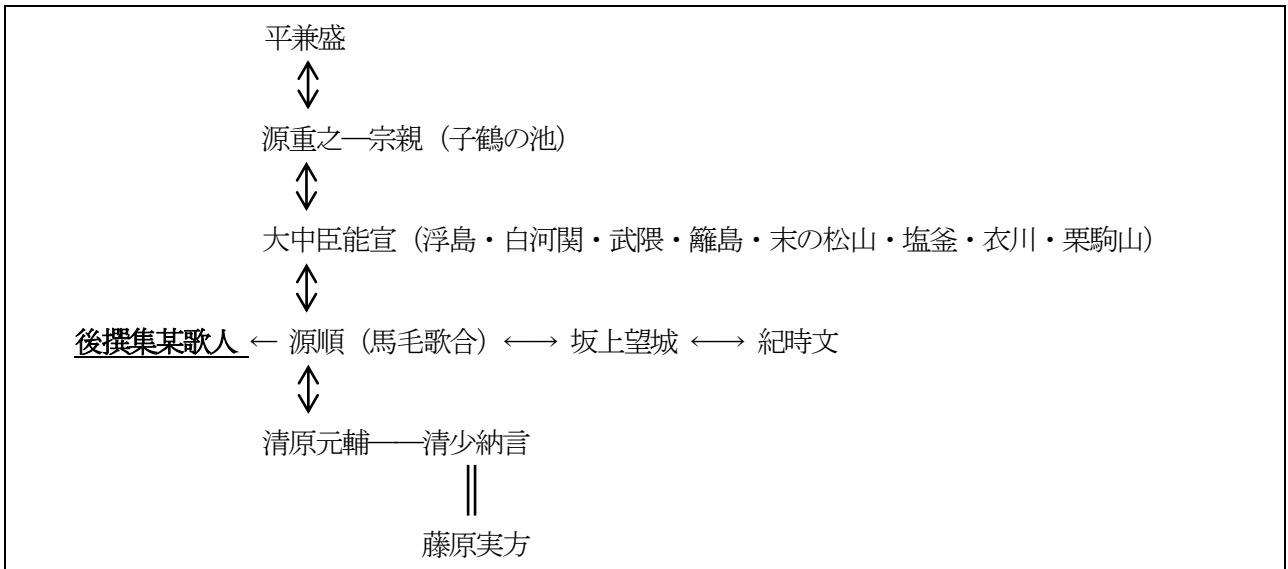
後撰集の詠み人知らず歌

1 伝承の古歌

2 同時代の秘匿すべき事情ある歌。有名人の恋歌など。

尾駁の駒の歌は、伝承の古歌にしては作歌事情が具体的過ぎる。伝承歌はエピソードの主人公に人々は関心をもつ。主人公の名が伝わらないというのも疑問である。したがって、この歌の

作者は、有名人の歌の可能性あり。それは藤原兼家か。兼家 23 歳頃。



2 藤原兼家の時代

『蜻蛉日記』(撰政関白藤原兼家妻の日記)

天曆8年(954)に日記作者と兼家が結婚して、間もなく作者の父は陸奥守として下向。

天徳2年(958)頃 兼家30歳頃 従五位上兵衛佐・少納言 作者23歳程

その頃、兼家と妻の「陸奥歌枕・馬尽し」贈答歌 父は陸奥赴任中 作者は陸奥女→陸奥駒

さて、かれ(兼家)よりかくぞある。

……今は**阿武隈**の逢ひも見で……何の**石城**の身ならねば……かひなきことは 甲斐の
国 速見の御牧に 荒る馬を いかでか人は 懸け止めむと 思ふものから……駒や恋
ひつつ 嘶かせむと 思ふばかりぞ あはれなるべき (兼家)

とか。

使ひあれば、かくものす。

なつくべき人も放てば**陸奥**の むまやかざりにならむとすらむ (日記作者)

【むまや—「馬屋」と「今や」】

いかが思ひけむ、たちかへり、

われが猶**尾駁**の駒の荒ればこそ なつくにつかぬ身とも知られめ (兼家)

【われ—汝、日記作者 身—兼家】

返し、また、

こま憂げになり増さりつなつけぬを こなは絶えずぞ頼みきにける (日記作者)

【こま—「駒」と「来ま」 こなは—「小縄」と「こなた(此方・こちら)」】

また、返し、

白河の関の堰けばやこま憂くて あまたの日をば引き渡りつる (兼家)

【引き渡り—「日が経過する」と「望月の駒を引き渡る」】

それから15年後の天延2年(974)4月、日記作者は再び駒の歌を大納言兼家に贈る。

さて、なでふことにも侍るかな。

今更にいかなる駒か懐くべき すさめぬ草と逃れにし身を

同年10月、兼家の兄太政大臣兼通から恋歌が。

書きたることは「かの、いかなる駒かとありけむはいかがが。

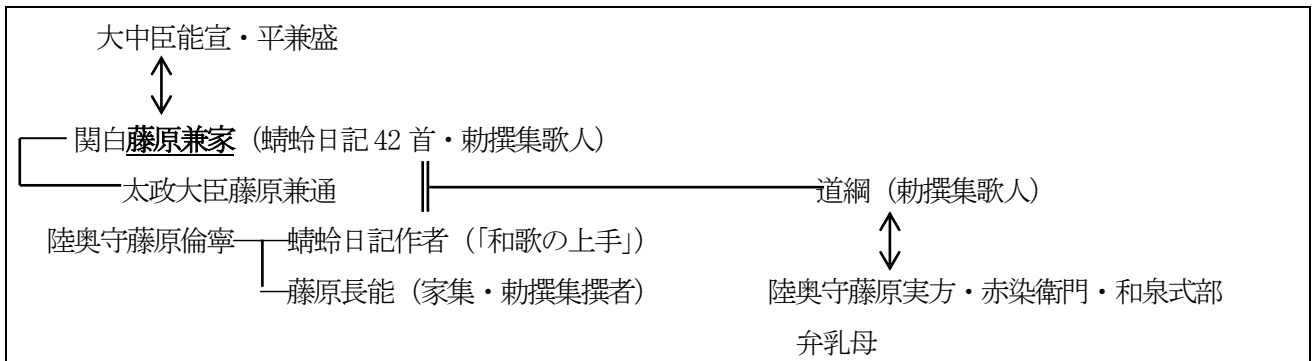
霜枯れの草のゆかりぞ哀れなる 駒がへりても懐きてしがな (兼通)

いかにして聞き給ひけることにかあらんと、思へども思へどもいとあやし。

笹分けば荒れこそ増さめ草枯の 駒懐くべき森の下かは (日記作者)

『小右記』(右大臣藤原実資の日記)

永延元年(987)3月16日 一条天皇即位翌年7歳の時、清涼殿において右馬寮の「駮」一疋を御覧になる。蔵人頭藤原実資伺候。時に兼家は摂政。和歌はない。



3 清少納言・能因の時代

i 相模

早う見し人の、馬にて逢ひたるに

綱絶えて引き離れにし陸奥の 尾駮の駒を外に見るかな 相模

返し

その昔も忘れぬものを蔓斑の こま必ずも会ひ見けるかな 橘則長

【蔓斑 馬の毛色、斑がつらなって続いているもの こま—「駒」と「此は」 必ず
—確かに】

或る男、「御気色の変れるは、今は参るまじきか」と、問ひたる返事に、

野飼はねど荒れゆく駒をいかがせむ 森の下草盛りならねば 相模

【盛りならねば—「下草が衰える」と「容色が衰える」】

ii 能因

京に上りて、為正朝臣に馬取らすとて

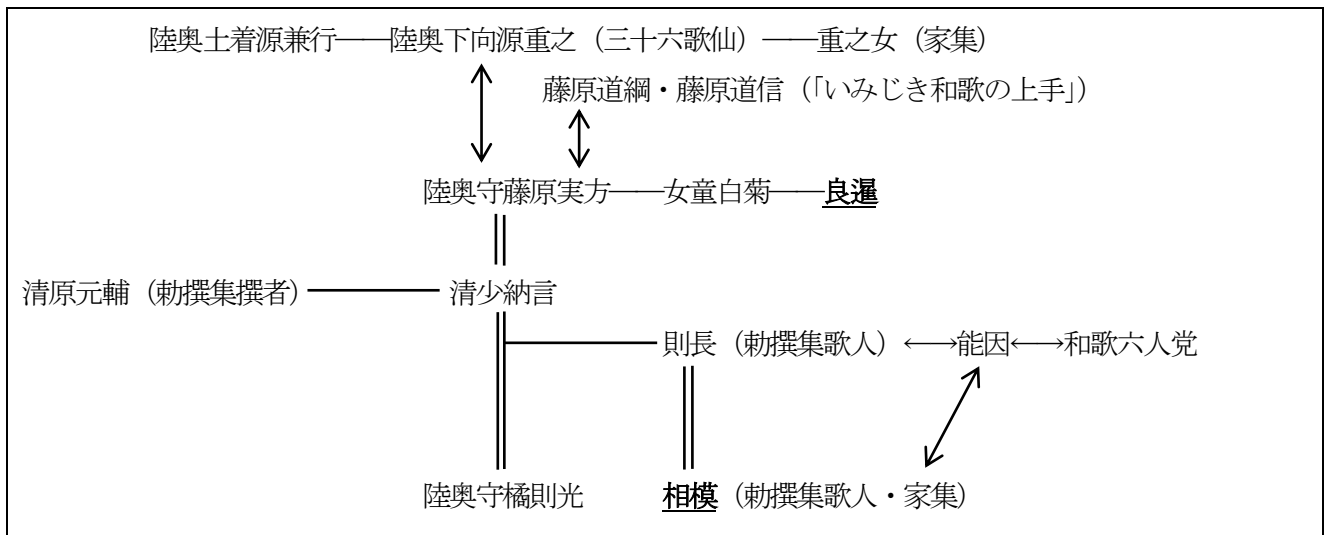
君がためなつけし駒ぞ陸奥の 安積の沼に荒れて見えしを 能因

iii 良暹 (母は実方女童白菊)「寂しさに宿をたち出でて眺むればいずこも同じ秋の夕暮」の歌人

八月駒迎へを詠める

逢坂の関の杉群引く程は をぶちに見ゆる望月の駒 (後拾遺集 秋上278)

【駒迎へ—諸国から献上される馬を逢坂の関で迎える行事】



4 陸奥の荒れる馬

陸奥の尾駁の駒も野飼ふには 荒れこそ増され懐くものかは（後撰集）

君がため懐けし駒ぞ陸奥の 浅香の沼に荒れて見えしを 能因（能因集 I 102）

荒れたる家に荒き馬繋ぎたり（能因集 I 117）

陸奥の安達の駒は懐けども けふ逢坂の関までは来ぬ 源縁法師（後拾遺集 秋上 279）

IV 和歌の中の陸奥の地名・歌枕

1 万葉集 会津嶺 安積香山 安達太良嶺 香取（所在地未詳） 真野の^{まの}草原^{かざはら} 陸奥山（小田なる山）
笠島

2 万葉集以外にある万葉歌人の歌

浮島（宮城県多賀城市浮島）

塩釜の前に浮きたる浮島の 浮きて思ひのある世なりけり

（山口女王から大伴家持へ）

【陸奥歌枕総まくり】（県別、年代順）

歌 枕	比 定 地	初 出 年	出 典
【青森県】 尾駁 外の浜 津軽	下北半島 津軽半島東岸 津軽平野一帯か	961 頃 1190 以前 1142	好忠百首 山家集 1011 久安百首 634
【岩手県】 岩手 衣川 衣の関 岩手山 栗駒山 衣川の関 撫子の山 束稲山	岩手郡（岩手山） 衣川 衣川周辺 岩手と宮城野県境 平泉市	951 頃 976 以降 976 以降 976 以降 976 以降 995～1004 1013 頃 1190 以前	大和物語 152 段 古今六帖 1553 古今六帖 1160 古今六帖 876 古今六帖 3237 重之集 139 能因集 I 146 山家集 1442
【秋田県】 象潟 八十島	由利郡象潟	995～1004 988 前後	重之集 316 能宣集 I 184

【宮城県】 小田なる山 末の松山 塩釜 籬の島 名取川 宮城野 小黑崎美豆小島 姉歯の松 松島 武隈の松 浮島 下紐の関 姉歯の橋 野田の玉川 十符（布）浦 緒絶の橋 うやむやの関 壺の碑	遠田郡涌谷町 多賀城周辺 塩釜湾 宮城郡松島町 名取川 仙台市 大崎市 栗原郡金成町姉歯 宮城郡松島町 岩沼市二木周辺 宮城郡松島町 白石市 栗原郡金成町姉歯 塩竈市玉川 宮城郡利府町 古川市三日町か 柴田郡川崎町 多賀城市	749 893 以前 895 以降 900 以前 900 以前 900 以前 900 以前 10 世紀 968 950 988 前後 988 前後 1013 頃 1013 頃 10 世紀後半 1086 1230 頃 1190 以前	万葉集 4094 古今集 326 古今集 852 古今集 1089 古今集 628・650 古今集 1091 古今集 1090 伊勢物語 22 蜻蛉日記 118 後撰集 1241・元善 能宣集 I 40 能宣集 I 257 能因集 I 147 能因集 I 149 為仲集 II 41 後拾遺集 751 土御門院集 山家集 1011
【山形県】 最上川 袖の浦	最上川 酒田港付近	900 以前 972 以前	古今集 1092 一条摂政御集 152
【福島県】 安達太良山 浅香山 会津嶺 真野の萱原 勿来の関 安積沼 阿武隈川 安達 信夫 石城 梁川 耶麻の郡 小鶴の池 小松川 安達原黒塚 白河の関 桑原の郡 音無の滝	安達太良山 郡山市日和田町 磐梯山か 相馬郡鹿島町真野 いわき市勿来 郡山市日和田町 阿武隈川 安達郡 福島市 いわき市 伊達郡 会津若松市 南相馬市 白河市・いわき市 二本松市 白河市旗宿 大沼郡三島町か 大沼郡三島町か	? 736 以前 ? 733 頃 9 世紀後半 900 以前 900 以前 900 以前 900 以前 955 頃 10 世紀前半以前 10 世紀前半以前 10 世紀前半以前 10 世紀前半以前 990 以前 990 以前	万葉集 1329 万葉集 3807 万葉集 3426 万葉集 396 小町集 I 5 古今集 677 古今集 1087 古今集 1078 古今集 724 蜻蛉日記 59 重之集 30 重之集 91 重之集 145 重之集 147 兼盛集 I 210 兼盛集 I 11 能因集 I 111 能因集 I 111

所在地不明 三江浦（能因集 I 140）、みつのえの浦（能因集 I 148）、すかの松山（為仲集 II 38, 39）

- 1 陸奥国府多賀城のある福島・宮城県の歌枕が最も早く、8 世紀から。両県の歌枕は 10 世紀前半までには大半が出そろう。
- 2 山形県域についても「最上川」は 10 世紀初頭までに詠まれている。
- 3 岩手・秋田・青森県は、10 世紀後半以降に初めて現れる。歌枕の数も少ない。
- 4 尾駈は地名か斑模様か

両説の間に揺れる解釈

i 地名説

『奥義抄』（藤原清輔・12 世紀）

「をぶちとは陸奥国にある所也」

陸奥の尾駈の駒も野飼ふには 荒れこそ増され懐くものかは（後撰集）

枕なる尾駈の真弓見るときは 妹が手風はいとど恋しき（好忠百首）

『八雲御抄』

「陸奥牧の名」

『勅撰歌歌枕集成』(吉原栄徳・おうふう)

陸奥の歌枕 後撰歌・相模歌を挙げる。

現代の『蜻蛉日記』・『後撰集注釈』も、ほとんどが地名説

ii 斑模様説

『奥義抄』

逢坂の関の杉群引く程は をぶちに見ゆる望月の駒 (『後拾遺集』278 良暹)

『和歌初学抄』(藤原清輔・12世紀)

馬 斑の駒、蔓斑、をぶちの駒 (略出)

『袖中抄』(顕昭・12世紀 奥義抄の後) 斑模様

奥州にをぶちという所の名は聞いたことがない。陸奥国にをぶちという所があれば疑いがないが。

良暹歌は、杉の間に月影の映り、斑に見えるということだ。

『八代集抄』(北村季吟)

「尾のまだらなる也」(後撰歌の注)

iii 両説

『八代集抄』 「牧の名と馬の毛と両説あり」(後拾遺良暹歌の注)

V 平安時代の陸奥歌枕流布の理由

- 1 陸奥前采女の万葉歌「安積山」が手習いの手本となったこと。滋賀県紫香楽宮跡(8世紀中ごろ)から、この歌を書いた木簡出土。

「阿佐可夜」麻加氣佐閑美由「流夜真」乃井能安佐伎己々呂乎和可於母波奈久尔

- 2 『古今集』巻20に東歌陸奥歌を置く

阿武隈川(福島・宮城) 塩釜浦(宮城松島湾) 塩釜の籬の島(松島湾) 小黒崎美豆の小島(宮城カ) 宮城野(仙台市) 最上川(山形) 末の松山(宮城多賀城市)

- 3 賀の祝いなどの屏風絵の流行 名所が画かれ、歌を記入

屏風歌

栗駒山なる人の家に、女ども紅葉見侍り

紅葉する栗駒山の夕影を いさ我が宿に移し持たらむ(能宣集I 234)

為光家名所屏風歌

円融天皇の永観元年(983)、大納言藤原為光(後に太政大臣)家

歌人 大中臣能宣 清原元輔 源順 源兼澄

名所 浮島 八十島

藤原兼家賀屏風歌

歌人 大中臣能宣 平兼盛

名所 籬島 浅香の沼 末の松山

某所屏風絵歌

栗駒山(宮城・秋田・岩手の三県にまたがる) 能宣集

4 陸奥下向の人への餞別歌

大中臣能宣 州浜に浮島の形を作り、歌を添える

わたつうみの波にも濡れぬ浮島の まつ（松・待つ）に心を掛けて頼まむ

5 陸奥名所を縁語・掛詞として、日常の歌に浸透

蜻蛉日記の兼家長歌と日記作者の「陸奥歌枕・馬尽し」贈答歌

梨壺で後撰集を撰んでいるときに、内侍局の女が衝立越しに藤の花を投げ込んで来たので、「それはあつてはならないこと」と能宣が歌を返した。

後ろめた末の松山いかならん 籬の島を越ゆる藤波

6 陸奥下向で歌枕以外の地名も詠む

源重之 柳（梁）川（福島県） 山の郡 子鶴の池（福島県）

源宗親（重之の子） 子鶴の池（福島県）

7 陸奥歌枕を広めた功績者

藤原兼家

大中臣能宣 歌合 屏風歌 餞別歌

源重之 陸奥の土地勘あり

能因 2回の陸奥旅行

（白河関、信夫郡、武隈の松、末の松山、塩釜、くははらの郡、音無しの滝、名取川、出羽の八十島 象瀉） 想像奥州十首（三江の浦、武隈の松、宮城野、末の松山、塩釜の浦、籬島、なでしこの山、姉齒の橋、みつのえの浦、野田の玉川）

VI 陸奥心象風景の形成 —— 山の彼方の空遠く、幸い住むと人の言う ——

1 陸奥の実体験のないほとんどの王朝人の歌は、心象風景に基づくものであった。

2 陸奥礼賛歌

i 『古今集』陸奥歌が一挙に陸奥幻想を掻きたてた。

陸奥はいつくはあれど塩釜の 浦漕ぐ舟の綱手かなしも（古今集 巻20 東歌 陸奥歌）

【いつくはあれどどこもそうだが かなしも—しみじみと心に感じられる】

ii 西行もまた

陸奥の奥ゆかしくぞ思ほゆる ^{つぼ いしぶみそと}壺の 碑 外の浜風 （山家集）

3 陸奥風雅再現

i 左大臣源融（9世紀）は河原院に塩釜の浦を模した庭園を造る。（伊勢物語 81段）

ii 藤原保昌、宮城野の萩を忍び、六条の家の庭に萩を植える。（能因集）

iii 橘為仲、陸奥守任果て上京に際し、宮城野の萩を長櫃12ケースに入れて持ち帰る。都大路は見物人で、押すな押すなのラッシュ騒ぎ。（鴨長明無名抄）

4 陸奥流浪物語

在原業平らしき男が陸奥に流浪する。京都人を珍しく思う女、小町らしき女、鄙びた女、取り柄のない人妻などと暮らす。陸奥の地名「沖の井手・都島」「栗原の姉齒の松」「信夫山」が詠み込まれ、異境への幻想を掻き立てる。（伊勢物語 14～15段、115段、116段）

5 陸奥流浪死の哀れさと同情（貴種流離譚）

i 陸奥守藤原真興^{さわき}は重病がやや回復したときに、女に逢いたいと申し出たが、女は逢わなかった。間もなく真興は任地で死亡した。（『大和物語』119段）

ii 源重之

iii 平兼盛

6 心象風景の中から歌語「尾駁の駒」は生まれ、王朝人の心の中に定着した。

VII 陸奥直視 —— ああ、われ人と尋めゆきて、涙さしぐみ帰りきぬ ——

陸奥に対する蔑視感

i 東国の言葉は「鳥が鳴く東」、鳥の囀り

東にて養はれたる人の子は 舌訛みてこそ物は言ひけれ 藤原輔相（拾遺集）

ii 陸奥男は浮気男

筑紫なる匂ふ兒ゆゑに陸奥の 香取少女の結ひし紐解く （万葉集 卷14 陸奥国の歌）

iii 陸奥女は「えびす心（粗野）」（伊勢物語 15 段）

iv 安達原黒塚には鬼が住む

陸奥の安達原の黒塚に 鬼籠れりと聞くは実か（大和物語・拾遺集 平兼盛）

v 陸奥赴任は泣きの涙

陸奥より中宮大夫藤原兼通へ

明け暮れは籬の島を眺めつつ 都恋しき音をのみぞ泣く 陸奥守源信明

【信明の陸奥赴任は52歳】

実綱邸で餞別の縁

過ぎ来たる心は人も忘れじな 衣の関をたち帰るまで 陸奥守橘為仲

【たち—「裁ち」と「立ち」】

浮島に参りて

祈りつつ猶こそ頼め道の奥に 沈め給ふな浮島の神 陸奥守橘為仲

【為仲の陸奥赴任は60歳過ぎ】

春、司召を思ひやりて、

春ごとに忘れにける埋木は 花の都を思ひこそやれ 源重之

VIII 参考書

山口博『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』（桜楓社・1967年刊）

関係ある章を。

- ・後撰和歌集の成立—梨壺を中心に—
- ・歌人兼家と蜻蛉日記
- ・沈淪歌壇の性格（源順・清原元輔・源重之・平兼盛・大中臣能宣・曾根好忠・源兼澄）
- ・源順論
- ・大中臣能宣論
- ・藤原輔相と藤六集

和歌史研究会『私家集大成 中古I・II』（明治書院）

【西本願寺本三十六人集 源重之集】

えだわかぬ

はるにあへども

むもれ木は

もえもまさらで

としへ

ぬるかな

源重之集

枝分かぬ

春に逢へども

埋木は

燃えも増さらで

年経

ぬるかな

